
恋愛期限～七海が残したもの～

P.Lea

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛期限〜七海が残したもの〜

【Nコード】

N4113G

【作者名】

P・Lea

【あらすじ】

恋愛期限の続編です。あとの悟は…？と読者様からの声を頂き書かせていただきました。

期限付きの恋愛…僕は5年前に、ある少女と約束をした。

でももう彼女は生きていない。

これは僕達が過ごした短くも長い483日間と、その後の話。

ガシャーンツ！！

ある病室から聞こえた音に僕は死ぬほど驚いた。

「な、なんだ！？」

病院は普段静かなため、この音は廊下まで響き渡っていた。

音の主は最近ここに入院してきた女の子…彼女の病名は急性リンパ性白血病。

この病気は、悪性化した未熟なリンパ球が著しく増加する事によっておこる病気。

簡単に言うならば血液のガンだ。

患者の多くは子供だが、どの世代にもおこりうる病気で完治は難しいとされている。

彼女はまだ16歳だった…最近は弱っていく娘を見るのが辛いと親も面会に来ていない。

（無菌室には割れるようなものはないはずなのに…）

そう考えながら慌てて部屋を空けると、自分が考えているよりも事態は深刻だと気付く。

彼女は割れた鏡の破片を手首にあてていたのだ。

（まずいな…自殺でも考えてるのか？この鏡は確か形見とか言ってたよな）

「これ大好きだったおじいちゃんの形見なんだろう？だめだよ…こんなこと考えたらおじいちゃんきつと悲しむよ」

その言葉に彼女は鏡の破片を手放した。

（…諦めたか。）

すかさず僕は鏡の破片を拾い集めた。

またこんな事をされたのでは仕事にならない。

念には念を入れて目を潤ませ彼女を見つめる。

「このままじゃ病気に負けちゃうよ。生きる目的を見つけたらどうかな？」

（我ながら良い事を言っただな…）

そんな事を思っていると、彼女が泣いているのに気が付いた。

（おいおい、勘弁してくれよ…泣いてる女に弱いんだ俺は。）

急に彼女がこちらを見た。

「それなら、私の生きる目的になってください。」

答えは決まってる。

「ごめんね…それは無理だよ。他にはないの?」

いくら自分が泣いている女に弱いからといって、こんなに若い子と付き合うわけにはいかない。

下手したら犯罪になってしまう…

「じゃあ、期限を決めてっていうのはダメですか?そしたら二度とこんなことしない。」

(あゝあ、脅されちゃってるよ俺。仕方ないか)

「…期間は?」

そう言うのを脅した張本人が慌てふためいた。
きっと断られると思っていたんだろう…

「い、一年半は?」

「長すぎだよ結構欲張りなんだね」

僕は彼女にOKの意味を込めて微笑みかけた。
これが僕らの始まり。

僕らが契約をしてから2週間が経っていた。

僕は看護師なので忙しく、毎日をこなすのが精一杯。

そんな状態でもなんとかない時間を作って彼女に会いに行った。

別に会いに行かなくても良かったのに、自ら彼女の元に訪れていたのは…きっと僕を見た時の彼女の顔が幸せそうだったからなんだろう。

その時の僕はボランティアでもしている気分だったのだ。

「おはよう。今日は顔色がいいね…何か良い事でもあったの？」

「別にないよ？悟さんは何か良い事があった？」

（嬉しそうな顔…ちょっとからかってやるか。）

「そういう時は嘘でも悟に会えて嬉しいから…とか言いなさい！」

それを聞いた彼女の笑顔に僕は不覚にも一瞬ドキツとしてしまった。

「あとさ、悟さんって言うのやめない？一応付き合ってるんだからさ」

少しでも余裕を見せようと思いついた言葉だったが、

「じゃ悟ね！」

そう呼ばれると、自分でも情けなくなる位に照れた。

「じゃあ俺は君を…」

七海と呼ぶね！の言葉が出ない…こんな事位で動揺するなよ自分！！
しかし僕が呼ぶより先に彼女が…

「七海で良いよ。」

「分かった七海ね！」

（ああ、情けない俺）

この時に気が付くべきだった…彼女の抱える大きな闇に。後になって知った事だが彼女は日記にこう書いていた。

8月22日（金）曇り

私にはあとどれ位生きる時間が残されているのだろう。
私はまだ生きたい。

彼女は辛い化学療法にも文句一つ言わずに耐えた。
見ているこちらが辛い位。

自分出来る事はないのか…彼女が苦しんでいるのをただ見ている
だけなんて耐えられない。

今思えば、この時には僕の中に彼女への愛が生まれていたんだと思う。

僕は彼女の為に出来る事を探した。結局僕が出来たのは彼女と両親
の仲を修復する事だけだったが彼女は、

「ありがとう悟…すごく嬉しい」

そう言っ流した彼女の涙は綺麗だった。

辛い治療に耐えた七海は個室から大部屋に移れるまでに回復した。
ここまで来れば、外出は無理でも庭の散歩くらいは出来るだろうと
僕は胸を躍らせた。

その願い通り、七海はしばらくすると散歩に出られるようになった。
車椅子に乗っている七海は軽かった…でも七海なら、これからも治

療に耐えていけると僕は信じていた。

告知から一年が経つか経たないかという時、僕は七海の治療医の村居先生に呼ばれた。

村居先生は腕が良いと評判のいい先生で、七海にはおじいちゃん先生と呼ばれていた。

「何の用なんですか先生」

「うん、まあ座りなさい」

僕は先生の前にある椅子に腰かけた。

「七海ちゃんの事なんだけどね…」

「何か異常でもあったんですか!!」

不安になって叫んだ僕に驚きながら先生が一枚の紙を出した。

「何ですかこれ？」

「ん…？七海ちゃんの退院許可証だよ。早く本人に見せてあげなさい」

（七海が退院！？って事は…）

僕は全速力で七海の部屋まで走った。

途中で看護婦長に注意されたが止まる事など出来なかった。

（早く七海の喜んだ顔が見たい！！）

七海の部屋に着くとドアの前で深呼吸をした。
勢いよくドアを開けると七海が驚いて僕を見た。

「どうしたの？」

「これ見てよ！！」

僕が渡した紙を不思議そうに見る。
彼女の目からは涙がぼろぼろと落ちた…その涙が泣き言一つ言わなかった七海の辛さを物語っていた。

それから1週間後、七海は部屋の荷物をすべて片付け病院を出ようとしていた。

先生や看護婦一人一人にあいさつをしている…次は僕の番だ。

「今までお世話になりました…」

彼女の言葉が終わる前に僕は言った、

「…半年。」

彼女が首をかしげる。

「あと半年だよ。まだ残ってるんだから…」

強気に言っただけだが、もし振られてしまったら…そう思うと切なくなっただけだ。

「良いの？」

彼女は消えてしまいそうな声で言った。

（そんなの良いに決まってる！！）

そう叫びたかったが先生達の手前それも出来なかった。

「退院したからって俺の事振るのはなしだぞ！！」

そう言うのと4日も前から用意していたメモを渡す。

書いてあるのはメールアドレスと彼女へのメッセージ。それから3日後僕らは初めてのデートをした。

前日から心臓が壊れてしまったんでは？と思うほど緊張していた。

病み上がりの彼女に無理をさせないようなコースを考える…何かが起きてしまった時の為に、病院の近くにある映画館やレストランを探して回った。

準備は完璧…のはず。

約束の場所に行くと七海はまだ来ていなかった。

七海を待つ間の10分は1時間にも2時間にも感じられた。

事故にあったんじゃないか？調子が悪くなって倒れたりしていないだろうか… たった10分で色んな事を考えた。

しばらくすると彼女が歩いてくるのが見え、無事だったのか…安心して足に力が入らなかった。

そして思った。

（ああ…好きだな）

この時初めて自分の気持ちをはっきりと理解した。

デートの途中も気が気ではない、何回も足を止め彼女の体調を聞く。

「大丈夫だってば」

「でも無理は良くないよ…公園で少し話そう」

色んな話をした。

好きな映画とか歌とか…とにかく色々。

帰る時間になつてもまだ一緒に居たくてさよならが言えない…。

自分はこんなにも人を愛せるんだと驚くほどに。

（まるで初恋だな…）

しかし自分の想いが大きくなればなるほど比例して不安も増した。
もし彼女を失ってしまったら…

もう七海が退院してから2ヶ月も経っている。

僕達はあれからも何回かデートを重ねお互いの距離を縮めていた。

七海と会う度に“愛しい”という気持ちが大きくなる。

七海が覚えているかは分からないが、明後日で僕等が出会ってちょうど一年。

僕にはどうしても七海に見せたい場所があった。

村居先生に許可をもらうと七海に電話をする、

「あのさ、明後日から旅行に行かないか？」

「明後日！？急すぎない？」

「お前には急かもだけど俺はずっと計画を立ててたから急じゃない！」

「でも…大丈夫かな」

七海の声が曇る…きっと体の事を気にしているんだろう。

「大丈夫だよ。俺がついてるんだから…なあ、来るだろう？」

「あはは！何、子供みたいな声だしてんの。気持ち悪いですよ」

不安になった…もしかして七海は旅行なんて行きたくないのかもしれない。

自分だけ浮かれて内緒で計画を立てたが失敗してしまったかも。

「行きたくないの？」

震えた声で聞く、

「ううん。楽しみにしてる…」

彼女の声は幸せそうだった、喜んでくれているんだろう。

「それじゃあ、場所とかはメールしとくから。おやすみ」

「おやすみ」

そっと電話を切ったあと、思い切りガッツポーズをした。
横にいた村居先生に、

「若いつて良いね…」

そうからかわれたが気にならない位浮かれていた。

いよいよ今日は七海との旅行当日だ…

「CDよし！地図よし！カメラも…あ、忘れた！！」

緊張はピークに達している。

車を運転するのも久しぶりだし、それに加えて七海と何時間も車の中にいるのだから緊張しないわけがない。

「まあ、落ち着きなつて！」

僕を緊張させている張本人に言われても…そう思ったが、嬉しさを隠しきれない七海を見ると、この緊張も馬鹿らしく思えてくるから不思議だ。

「それじゃあ出発！」

幸先よく出発するはずだった車は、おかしい音をたててエンストした。

「最悪…」

「ありえないね、これ…ギャグじゃん」

「だよな…ははは。」

二人で苦笑いをした。
このエンストのおかげで場の空気は和んだが、僕は内心落ち込んでいた。

（かつこ悪すぎだろ…エンストって……）

しかし、その後の道中は平和そのものだったので僕は安心しきっていた。

…もっと七海の体を気にかけていなければいけなかったのに。
ほんの少しの異常にも気付かなければいけなかったのに。だが今となってはどのような事も出来ない。

僕が生まれたのは長野県だった。

毎年この季節になるとコスモスで有名になる。

僕の生まれた町にもコスモスが一面に咲く公園があった。僕はその公園を七海に見せたかったのだ。

「もうすぐ着くから準備しとけよ」

「……………」

返事がない…さっきまで元気に話していたはずなのに。

（…寝ているのか？）

もう一度七海に呼びかける。

「七海？」

すると七海は驚いて顔を上げた。

（どうしたんだろう？まさか具合でも悪いんじゃない…）

不安になった僕は七海に、体調はどうかと聞こうとした、

「七……」

「きれい……」

七海の言葉が僕の呼びかけを掻き消した。

呼びかけるタイミングを失った僕は、しばらく七海を見ていた。

（元気そうだし大丈夫かな？）

うかつにも僕はそう思い込んだ…いや、思い込む事にした。

そうしなければ不安に押し潰されてしまうと思ったから…完全に僕のエゴ。

この事が後に僕を激しく後悔させるが、自業自得だったと思う。でも僕には事実を受け止めるほどの勇気がなかったんだ。

コスモスに感動している七海はすごく幼く見えた…気が付くと僕は七海を抱きしめていた。

「わ！どうしたの悟？」

「良いじゃん。別に…」

自分でも分からなかった、体が勝手に動いたんだ。

「気に入ってくれた？」

「うん…すごく素敵な所だね。また来たいな」

「いつでも来れるよ…また来ような。」

「うん」

その約束は僕等の心を固く結んでくれた。

しばらく二人でコスモスを眺めた後、コスモ스에囲まれながら僕等は初めてのキスをした。

キスなんて初めてじゃなかったのに体中が心臓みたいに脈打って苦しかった。

僕は初めて心から感動できるキスをした。

（これがファーストキスだ…）

「照れますね…」

「うん、心臓が目から飛び出しそう」

「馬鹿…それを言うなら口からだろ……勉強しろ」

そう言うのと車まで手を繋いで帰った。

幸せな時間だった…

それから2週間後…七海が僕の病院に運びこまれた。検査の結果が告げられる、

「七海ちゃん…落ち着いて聞いてほしいんだ」

村井先生の顔が曇る。

「再発だった…」

七海は何も言わずに涙を流した。

何も言ってやれない…何もしてあげられない…僕に出来るのは涙を我慢する事だけ。

辛くなる治療…過酷な運命を受け入れるたびに七海からは笑顔が消えた。

…僕の愛する笑顔が。

異常に夜を恐れ眠る事を拒否する…このままでは七海の体がもたない。

僕は毎晩七海の病室を訪れた。

「また来たの…」

冷たい言葉…僕を突き放そうとしているのがはっきりと分かる。

「言っただろ、毎晩来るよ」

「私なんかの為に無理しないでよ。どうせ…」

確かに辛い…疲れているし眠い。

でも僕が彼女の為に出来るのは見守り、そして励まし続ける事だけ。彼女を抱きしめる…細い体は少し力を入れただけで壊れてしまうだ

ろう。

「もう死にたい…」

消えてしまいそうな声。

しっかりと捕まえていないと七海が消えてしまふ気がした…自然と手に力が入る。

「やめろよ。そんな話聞きたくない。」

「悟は良いよね。これからの未来がある…でも私は死ぬ！！だから早く死にたいよ。このままは怖い。」

（どうして分かってくれない…僕には君が必要なのに）

行き場のない怒りが襲う。

「死ぬなんて…簡単に言うな。」

辛いのは彼女、治療に耐え続けるのも彼女…分かっているけど不安に勝てない。

必死に怒りを抑え言葉を絞りだす、

「人は生きることが諦めたとき死に負ける。俺はそういう人人達を嫌というほど見てきたから分かるんだ。」

彼女に言うふりをして自分に言い聞かせる…俺まで負けてどうする！！

僕に出来るのは見守る事。

彼女を励まし続ける事。

分かってた事じゃないか。

一瞬でも迷いを見せてしまえば傷つくのも苦しむのも七海なんだ。
僕に出来る事を限界を超えても続けてやればいい。

この世に届かない思いなど存在しないのだから。

（七海：お前は消えたりしないよな）

そう考えていた。

その日を境に七海は弱音をはかなくなっていた…

（このままなら、きっと…）

七海とまたコスモスが見られるんだ、デートだって行ける。

七海は病気になるか負けない。

しかしその願いが叶うことはなかった。

副作用で口内炎がひどいらしく薬さえも飲めない。

見るからに痩せ細りそこには入院前の面影など感じられなかった。

「七海：今日はいい天気だね」

もう喋ることが出来なくなっていた七海は、首を縦に動かす。
息をするのにも苦勞し、眠るだけでも体力を消耗していた。

「頑張れ、またコスモス見に行くんだろっ？」

七海の頬を涙がつたう…

「ごめん…お前はこんなに頑張ってるのに…無神経だな俺。」

頑張っている七海に頑張れ、なんて…最低だ。

これ以上何を頑張る事がある？自分は何も出来ないくせに！！
痛みを和らげることも、七海の笑顔を取り戻すことも、口中に出来てしまった口内炎一つさえも治してやれないくせに。

「な…っ…で」

七海が一生懸命声を出そうとしている、

「何だよ…無理して喋るなよ」

少しでも体力をつけてほしい。

こんな自分の為に使っているいい力など七海には存在しない。

しかし七海は、よほど伝えたい事があるのか喋るのをやめない。

七海の負担を少しでもなくそうと耳を顔のそばまで持っていくと、
小さな声で…

「な…かな…で」

そう聞こえた。

（泣かないで？お前人の心配してる場合じゃないだろ！！）

こんなに苦しんでるのに何もしてやれない僕を励ますなんて…なぜ
そんなに人を想えるんだ？

彼女には僕の心の涙が見えていた…

「ごめん…ありがとう。」

そう言うのが精一杯だった…。

そして僕達の別れの時は目の前まで迫っていた。

ゴホッ…

それから3日後だった、七海が咳をしているのを聞いたのは。

「七海っ！？まさか風邪なんじゃ…」

七海の上にあるボタンを必死に押す、

「どうしました？」

看護婦が部屋に入ってきた。

「咳をしているんです。風邪だったら…」

「分かったわ、落ち着きなさい」

「でも…」

「先生を…村居先生を呼んで来てくれる？」

僕は走った。こんなに走ったのは七海に退院を知らせる時以来だ…

「村居先生！！七海ちゃんが咳を…」

「分かった。」

先生が七海の症状を見て言った。

「ご両親を呼びなさい」

七海の両親が呼ばれた。

「娘さんは非常に危険な状態にあります。覚悟していて下さい……」

急性リンパ性白血病は、免疫力が落ちる事によって感染症を起こしやすい状態に陥る可能性が高い。

それは患者にとって命に関わる事だ、たとえただの風邪であったとしても。

七海は死の告知を受けたも同じ……

10月5日 pm5:10

熱にうなされ続け、息を吸う事さえ困難な七海……さっきから呼吸が落ち着いてきている。

しかしそれは生の兆しではない。

言ってみれば死への準備。

呼吸の間隔が段々と長くなり始めた。

いつ止まってしまうか分からない小さな心臓は生きようと脈打つことを止めない。

「七海……」

両親が声をかけると、かすかに七海の指が動いた。

まだ生きている…まだ僕の目の前で動いているじゃないか。
そう思うと悔しくて涙が出た。

「まだ期限切れてないんだぞ…好きなんだ君が居ない人生は考えられない。」

七海が目を開けた。

もう見る機能を失っている目で僕を探している…僕は七海を抱きしめた。

「置いて行かないで…」

本当の言葉…僕の人生をかけて守りたかったアナタに向けた嘘偽りない本当の言葉。

病室中に響き渡る心配停止の機械音…僕の腕の中にいる君は温かい。

p m 5 : 1 4

一つのベッドが主人を失った。

かつて七海が寝ていたベッドに横になる。

七海が見ていた景色は涙が出るほど寂しかった…白い天井が七海の最後の世界。

「頑張ったな…お前。よく頑張ったよ」

病室のドアが開いた、

「悟さん…」

七海の母親だった。

「これ受け取ってやって欲しいの」

「何ですか…これ？」

「七海の日記に挟んであったのよ、手紙…あなた宛のね」

（七海からの？）

僕は急いで手紙を開けた。

そこに書かれていたのは、僕への願い…

『生きて』

痛みを耐えながら書いたんだろうか…字が曲がったり途切れたりしている。

何もしてあげられなかった僕への宿題…次に会える時まで生きる事、自ら死を選ぶ事無く生き続ける事。

七海が残したものは僕の命。

この命は七海の為に生き、七海と共にある…

僕には見えるんだ七海…君はコスモスに囲まれて僕に会えるのを待っていてくれるんだよね？

ねえ七海、僕は今日も朝を迎えているよ。

休みは少ないし、忙しくて目が回りそうな毎日だけど生きる事は素晴らしいね。

僕は君が見た最後の世界に花を植えました。
僕には絵心がないので患者さん達と一緒に
見てくれましたか？

白い天井に広がるコスモス畑を…。

僕は、君に会えるその日まで寂しい部屋にコスモスを植え続けるつもりです。

今日も僕は生きています！

（後書き）

長い間お付き合い頂きありがとうございます。
感想を頂けると勉強になります！
是非宜しく願っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4113g/>

恋愛期限～七海が残したもの～

2010年10月9日19時14分発行